

## 原 著

# ソーシャルワークにおける質的研究の科学性について一考察

A consideration about the scientific nature of the qualitative study in social work

佐藤 哲郎

**要約：**本稿はソーシャルワーク研究をすすめていくなかで、第1に、人間科学とソーシャルワークとの関係性を先行研究を踏まえて位置づけていく。第2に、ソーシャルワーク研究を行う上で、質的研究が科学的であることを位置づけていくことを目的とした。人間科学に関する先行研究を踏まえソーシャルワークが人間科学領域に含まれることを明らかにし、西條(2005)が体系化した「構造構成主義」を認識論に据えて質的研究の科学性について考察した。そして、質的研究の科学性を担保するために、構造主義科学論による科学の認識、コトバの信憑性と解釈の妥当性、質的研究を広義の科学性に位置づけ、「条件開示」を科学性の条件として示した。

**Key Words：**質的研究、科学、ソーシャルワーク、構造構成主義、構造主義科学論

## はじめに

### 1. 問題意識

近年、ソーシャルワーク実践・研究においても、科学的根拠(エビデンス)が求められるようになってきている。一般的に研究方法では、人間を対象とする領域では、「量的研究」と「質的研究」にわけることがよくある。量的研究は、医療分野での代表的な研究方法であり、例えば遺伝子解析や生化学的な動物実験、また新薬の効果を調べるための無作為化比較試験(randomized control test: RCT)などがある。量的研究では、人間を対象とする場合、多くはある現象について数値を用いてデータ化し、統計的な方法で解析する。そのため、量的研究は客観的で再現可能であり、科学的証拠(エビデンス)の水準が高いものと考えられている。

一方、ソーシャルワーク研究では、多様な現象に関するクライアントやソーシャルワーカーの認識、価値、不安や葛藤などの心理的側面を扱う質的研究も少なくない(例えば三毛2003; 横山2008; 長崎2010)。このように、生きづらさを抱えた当事者等への支援を行うソーシャルワーカーにとって、その人の生きてきた意味や価値により添いながら援助を展開していく必要があり、その実践を研究していくためにも質的研究は重要な研究方

法であると筆者は考えている。しかし、質的研究は、研究者の主観による解釈や分析が中心で客観的ではないという批判をよく受ける。この主観と客観とはいわば、「主観=非科学的、客観=科学的」という構図を生みだしているともいえる。しかし、客観的(科学的)と認識される量的研究での数量的データも、研究者の解釈が全く及ばずにあらかじめ外在しているわけではない(榎本2003: 1-9)。なぜなら、量的研究といえども、質問項目や選択肢は研究者の関心に基づき作成されるため、研究者の関与は極めて強いからである。

しかし、その議論だけでは「質的研究は主観的(非科学的)」という批判への回答になっていない。実際に、質的研究において再現性や妥当性の問題にふれている書籍はある(例えばFlick/小田・春日・山本・宮地訳、1995=2002)。しかし、質的研究の科学性や一般化可能性に関する研究は少数である(例えば西條2005, 2008; 京極2006)。そのなかで、医療分野での量的研究を専門とし、その限界性を踏まえつつ質的研究に深い洞察をしている高木は、科学的研究を行ううえでも、主観/客観問題や、量的/質的などの信念対立の問題を解決するためには、現象学に基づく考え方(竹田2008)や、西條が体系化した構造構成主義の考え方(西條2005)が極めて有用であると述べ、さらに構造構成主義を支える構造主義科学論(池田1988)、竹田現象学(竹田2001, 2008)、ソシユール的一般言語学(丸山1981 立川・

山田1990)などは質的研究の科学性を考えるうえで重要な示唆に富む思想であると述べている(高木2009a: 70)。

このように、従来科学的研究と認識されてきた量的研究だけではなく、質的研究の科学性も担保できるようになれば、研究の幅が広がるだけでなく、研究におけるトライアングレーションもより有効になるものと筆者は考える。

## 2. 研究の目的と方法

そこで本稿では、ソーシャルワーク研究をすすめていくなかで、第1に、人間科学とソーシャルワークとの関係性を先行研究を踏まえて位置づけていく。第2に、ソーシャルワーク研究を行う上で、質的研究が科学的であることを明らかにすることを研究目的とする。

その目的を達成するために、第1章では、先行研究を通じて人間科学の範囲にソーシャルワークが位置づけられることを明らかにする。第2章では、科学に関して科学と非科学をわける境界線があるのかどうか、そして科学の二大潮流といわれる帰納主義と反証主義について概説するとともに、その限界性についても述べる。あわせて、ソーシャルワークでの科学性に関する先行研究をおさえるとともに、人間科学(ソーシャルワーク領域)において求められる科学の条件について提示したいと思う。第3章では、西條(2005)が人間科学領域における「不毛な信念対立<sup>1)</sup>の超克」を目指して体系化した構造構成主義を認識論に据えて質的研究の科学性について論じていきたい。最後に、本研究の意義および限界について明らかにしたい。

## 第1章 人間科学とソーシャルワークとの関係

### 1. 人間科学とは何か

波平と道信(2005: 4)は人間科学について、「自然科学のように人間の生物学的、物質的側面を研究するのではなく、人間の行為や精神活動、心理状態を研究しようとするものである」と述べている。

杉万は自然科学の重要性を確認しながらも、自然科学の鉄則が通用しない現象を対象とする人間科学の必要性を指摘している。杉万によれば両者の違いは、「自然科学は、人間がそれを知らうが知るまいが存在している事実を解明しようとし、その目的は研究者と研究対象を一線で分離し、一線の向こう側に据えた研究対象を、研究者は一線のこちら側から外在的に研究すべしという方

法論的鉄則として具現化される。一方、人間科学は当事者と研究者が共同実践を展開し、その中から知識を紡ぎだすことを目的としている」と述べている(2009: 7-8)。さらに杉万は科学を、言説空間を豊かにする営みと捉えたうえで、自然科学と人間科学の言説の違いを明らかにしている。すなわち言語空間の構成を「人称的(指示・述定・表出・喚起)―没人称的(指示・述定)」の軸と「知覚現場的言説―概念思考的言説」の軸によって整理し、人間科学の言説空間は、準没人称的あるいは人称的な知覚現場的・概念思考的言説によって構成されていると論じ(2009: 10)、とりわけ、人称的な知覚現場的言説、すなわち主観的言説が人間科学の言説空間で重要な地位を占めていることを指摘している(図1参照)。

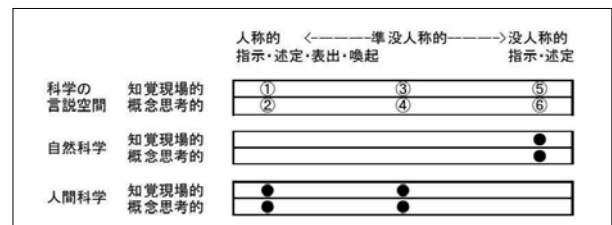


図1 科学における言説空間の構成

杉万俊夫(2009)「人間科学における主観的言説の重要性」  
『集団力学』第26巻, p10

西條(2005: 5-7)は、人間科学の特徴として「人間を全体として捉える」とし、人間科学の知とは「生命や個体、集団、行為、環境などの構造の意味と機能を追及して人間の事象を明らかにしようとする、脱領域的なもの」と述べている。

人間科学の歴史は、自然科学の理論と方法論を人間社会の現象の分析に応用した実証主義から始まった。しかし、自然界の物質的現象を実証主義の基本原則である因果関係によって説明することはできても、複雑な人間社会の諸現象を因果関係によって解明することはできない。なぜなら、人間の社会は、多様で複雑な意味を含む行為のうえに成立しているからである。そして、人間科学は人間の背後にある人間の精神活動を知るためには、人間の行為の相互関係や行為の意味を理解・解釈していくことが重要となる。そのために、人間科学は学際的な科学を必要とし、生物学などの自然科学のみならず、心理学、社会学、哲学、人類学、教育学などいわゆる人文科学との関連が深いといえる。

## 2. 人間科学とソーシャルワークの関係

ソーシャルワーカーは、クライアントである生活課題を抱えた者の一部分をみるのではなく、人間全体をみて援助していくということに異論はないだろう。また、ソーシャルワーク実践は、生活への援助であるため、社会学や心理学、その他生活に関連している周辺の諸科学を援用してきた歴史的経緯もある。以上のことから、ソーシャルワークの科学性は人間科学の枠組みに即して考察していくことが望ましくと筆者は考えている。

さて、人間科学が扱う事象は、大きく2つに分けられると考えられる。それは、「客観的で明確な事象」と、「主観的／相互交流的であいまいな事象」である（齋藤2003：66-67）。人間科学が「人間を全体として捉える」ことを特徴としていることは、両者を扱う科学的認識論及び方法論が必要であるということである。

前者に対しては、論理的実証主義に基づく定量的、統計学的方法論が用いられる。これを一般的に「科学的」と認識されているだろう。一方、ソーシャルワークの実践現場で実際に起こる事象を扱おうとする際、後者の主観的、あるいは相互交流的であいまいな事象を避けて通ることができない。例えばソーシャルワークにおける面接技法とは、まさにクライアントの主観や相互交流的に展開されるものである。ゆえに、実践現場で実際に体験される事象の多くはこの「主観的／相互交流的であいまいなもの」に属するのである。

一般に、主観的なもの、あいまいなものを研究対象とするとき、科学的方法論を適用することは極めて困難であると考えられてきた。それは、ソーシャルワーク実践において、ワーカーとクライアントの間の関係性が介在するような事象は、客観性が保障されないことから、科学的ではないと考えられてきたともいえる。しかし、現代の人間科学的方法論は、このような狭い意味での科学的方法論の限界を超えようとしている（西條2003）。つまり、人間科学が扱う「客観的で明確な事象」と「主観的／相互交流的であいまいなもの」を包括する科学論が求められているのである。

## 第2章 科学とは何か

### 1. 科学と非科学の境界—帰納主義と反証主義—

一般的に「科学」という用語は、例えば「真理を追究する」や「客観的」といわれるようなイメージすることが多い。それは、英語の「科学 (science)」の用例が一般的に物理学や化学などに限られがちだという理由も

あるだろう。

一方、ドイツ語の「科学 (wissenschaft)」は観察や実験といった経験的方法を用いる科学に限定されないばかりか、確証のために厳格で間主観的に合意された手順を持ち系統的合理的におこなわれる探求であればどのようなものでも包含され、数学や論理学といった科学とともに、意味解釈や経験の記述に関心をよせる解釈学や現象学といった学問も含まれるのである（Schwandt, T. A. /伊藤・徳川・内田監訳2007=2009：29）。このように、「科学」と「非科学」をわける境界はどのように捉えられているのだろうか。

科学的とは何かを考える上でポパー（Popper, K. R.）の科学哲学における認識について触れてみたい。帰納主義とは「一回起性の出来事の観察や記述を積み重ねていく中で、そこから共通の事実（法則）を見出す」といった立場のことであり、質的研究者にとって支えになるものである。この帰納主義に対して批判的に指摘したのがポパーである。ポパー（Popper / 森1976=2004：162）は「帰納といったものは存在しない。全称的理論は単称言明から導出できないからである」と帰納主義を批判している。つまり、1,000羽のカラスが黒くても、カラスが黒いという命題の正しさを証明できるのは調べた1,000羽のカラスだけであるということである。ポパーは、①どんな出来事が起きても常に正しい記述<sup>2)</sup>と、②どんな出来事によっても原理的に反駁できないような記述<sup>3)</sup>は科学理論としては認められないと述べており、科学理論は一回起性の出来事を積み重ねても真であることは導けないが、偽であることは導けることから「経験的科学体系にとっては反駁されうることが可能でなければならない」（Popper / 大内・森1959=1971：49）と主張した。つまり、全称的言明から個々の単称言明を推論することができるし、全称的言明は、それに合わない出来事が生じた場合、その言明は棄却されるため、偽であることが導き出すことができる。反証主義とは、科学的命題は「偽」であることが示せる構造になっている必要がある、推測統計学における「帰無仮説の棄却」という考え方と相性がよいため、これを重んじる研究者が好む科学論だといえる。

### 2. 帰納主義と反証主義の限界

反証主義について池田（1990：37-38）は、人は記述自体を観察するのではなく出来事を観察するということは「帰納」を前提として行われているということであ

り、「実は『一回起性』の出来事には、あらかじめ共通な事実が含まれているという帰納主義の前提を、暗黙裡に認めている」とし、帰納主義と反証主義は「拠って立つ論拠はほとんど同じである」と鋭く指摘している。

さらに池田は帰納について、「観察されたデータが外部世界の現象と完全なるコピーでない以上、この説明の正しさは保証されない」と述べている(1988:239-240)。つまり、帰納が成立するためには、①主体とは独立した外部実在がある、②人間の認識構造が同一である、という2つの条件を満たす必要がある。しかし、第1に、主体とは独立した外部実在は原理的には保証できない。なぜなら「現実だと確信していたが実は夢であった」という経験があるように、私たち人間は、今確信している外部実在が真実かどうかは原理的に保証することはできない。第2に、人間の認識構造に関しても原理的にはそれを保証することはできない。たとえば私たちが同じ赤を見ても、それが完全に同じ赤いとして見えているという保証はどこにもない。そして「意味」や「価値」領域においてその認識が完全に一致することが少ないように、私たちは「意味」や「価値」の領域では、同じ出来事から異なる構造を見出すことがあるのである。

西條(2005:108)が指摘しているように、帰納主義、反証主義が機能するための根本仮説(外部実在と各人の認識構造の同一性)に依拠することは、信念対立を引き起こし、意味領域を扱えないといったように、人間科学にとっては致命的ともいえる犠牲を強いることになる。

### 3. ソーシャルワーク領域での科学観の動向

ソーシャルワーク領域において「実践の科学化」を提唱している岡本(2000:252)は、「ソーシャルワーカーの日常的なクライアントとのかかわりをめぐる貴重な経験を体系的、系統的に集積し、その蓄積のなかから経験法則を抽出し、内なる世界から内在的に援助理論の構築を試みようとするものである」と述べている。このことから、岡本は帰納法的な観点から「実践の科学化」を提唱していると捉えることができる。しかしながら、帰納主義による一般化とはいわゆる質的研究にとっての支えになっているパラダイムである。だとすれば前述のように、反証主義をパラダイムとする推測統計学等に代表される量的研究との科学性に対する信念対立は解消されない。

安井(2009a:49)は、中村(1992)による科学認識

論<sup>4)</sup>を踏まえて、「西洋科学の知」では「利用者や支援者の実感よりも客観的な(数値に置き換えることのできる)エビデンスを重視し、利用者の生活を客体化してとらえてしまうことにつながらないだろうか」と指摘し、ソーシャルワークの実践の科学化には「臨床の知」に依拠し「『科学化』の名のもとに捨象された利用者の個性や生きる場、生きる意味の多義性、主体性や選択といった価値を問い返すようなフィードバック過程こそが科学化の焦点でなければならない」と述べている。さらに、安井(2009b:42)はソーシャルワークの支援科学としての特性として「西洋科学の知と臨床の知を用いて相対化していくプロセスにある」と指摘し、その科学化への方法として「ひとつは、利用者と支援者のあいだで育まれた共同主観性(おなじ主観内容を、両者がわかちあうこと)に着目することである。そうだと感じる人(主観)の数が増えれば増えるほど、それはより『客観的』なものになるので、共同主観性と客観性は同じベクトル上にあると考えられるからである」と述べている。

安井の指摘は一見すると妥当と思われるが、主観の数が増えれば客観的なものになると述べていることから、根底には量的パラダイムに依拠した「客観」という根本仮説があるといえる。確かに利用者側に焦点をあてた「臨床の知」による科学化は重要な視点であろう。しかし、それでは「西洋科学の知」と「臨床の知」による信念対立はやはり解消されない。

つまり、ソーシャルワークの「実践の科学化」における課題として「帰納主義 対 反証主義」、「西洋科学の知 対 臨床の知」といった2項対立、そこには「量的研究 対 質的研究」といった対立も含まれていると考えられる。

筆者は、そのような不毛な信念対立ではなく、両者を包括しうるような認識論が必要だと考えている。つまり、異なるパラダイムを包摂しつつ、科学的エビデンスを担保するような科学論や認識論というものが必要になるということである。これらの対立はソーシャルワークを展開していくなかで好ましいこととはいえないだろう。

そこで、本稿では特にエビデンスに関する信念対立をどのように超克していくかという目的のもと、近年、医学、看護学、心理学などの人間科学領域において導入されている構造構成主義を認識論に据えて論じていきたい。志村(2008:1)は、エビデンスの観点から「構造構成主義的ソーシャルワークの枠組みとして提唱できる

のではないだろうか」と述べているように、人間科学領域における諸学問領域は、いわゆるソーシャルワークが依拠してきた周辺諸科学とほぼ重なるため、構造構成主義に依拠したソーシャルワークの有効性はある程度想像できるのではないだろうか。

### 3. 人間科学（ソーシャルワーク）領域で求められる科学の条件

科学に関するこれまでの論述を踏まえ、認識的問題点を考えてみたい。人間科学が扱う「客観的で明確な事象」と「主観的／相互交流的であいまいなもの」、つまり異なるパラダイムを包摂しつつ、科学的エビデンスを満たす科学論ということになる。すなわち、人間科学の科学論は、根本仮説（外部実在や認識構造の同一性）となるような一切の前提を措定せずに、共通理解可能性を担保するものでなければならない。

こうした問題を解決するための科学論とはどのように捉えたらよいのだろうか。京極（2006：475-476）は、認識論的現実主義、反還元主義、構造構成主義を比較検討するなかで、科学性を同時に保証するもっとも妥当な認識論として構造構成主義を提唱している。そこで、本稿においても構造構成主義を認識論に援用することでソーシャルワークにおける質的研究の科学性を考えてみる。

## 第3章 質的研究と科学性

### 1. 質的研究とは

西條（2007：17）が質的研究とは何かに対してまだ包括的な答えが出ていないことを指摘しているように、質的研究の定義については様々な見解がなされているのが現状である。その理由として質的研究が多様な認識論に基づいており研究方法も様々であるからだと考えられる（高木2009a：70）。しかし、フリックによれば、多様な認識論があるけれども、質的研究における理論的立場として共通する特徴として、①認識論の原則としての理解、②出発点としての事例再構成、③基礎としての現実（リアリティ）の構築、④実証的資料としてのテキスト、が挙げられている（Flick／小田・春日・山本・宮地訳、1995＝2002：36）。

ウィリッグ（Willig, C.）は、多様な質的研究の共通する点として質的研究者は「意味に対する関心をもつ」傾向にあると述べ（Willig／上淵・大家・小松訳、2001＝2003：11-15）、認識論やその特徴についてかな

り詳細に記載しているが、質的研究の明示的な定義は記載されていない。

波平と道信（2005：1-4）は、質的研究は研究者の学問的背景や研究対象領域によって多様であるが、そこには共通の理解もあるとして、その特徴を、①多様な研究方法としての質的研究、②研究対象が方法論を決定する、③研究対象の人々の視点にたつ、④文脈を重視する、の4つをあげている。

高木は、竹田現象学と池田構造主義科学論での議論を踏まえて、「自然事物（モノ）を研究するのが『量的研究』、心的存在のなかに生起する現象（コト）を扱うのが『質的研究』であると区分しています」と述べ（2009a：3）、質的研究を「研究対象者（情報提供者）の心的存在である内部世界のある現象に関するテキストを、研究者が主観的に解釈し再構築（構造化）する研究である」と定義している（2009a：74）。

この高木の定義については、私たちに立ち現われる現象を出発点としており、その実在性は疑いようがないため、より根源的であると筆者は考える。よって、本稿での質的研究の捉え方については、高木の定義に依拠することとする。

### 2. 質的研究における科学性の動向

ストラウスとコービン（2004：324-326）は質的研究の科学性について「検証可能性」「再現性」「一般化可能性」といった自然科学で用いられる概念を拡張する形で議論を展開している。それについて木下（1999：153-155）は「個のアプローチの説明にとって、科学一般からの位置付けを行うという、そうした設定そのものが適切でないと考えられる」とか「『科学』概念一般を準拠点として設定したため、ストラウスとコービンは理論矛盾に陥っている」といった指摘をしている。

フリック（1995＝2002：284）が「80年代の半ばから質的研究を評価する代替の基準を作るさまざまな試みが行われている」と述べているが、西條（2008：156-157）が指摘しているように、それらは科学性を担保する条件を論証するものではない。たとえば、リンカーンとグーバ（Lincoln, Y. S., & Guba, E. C. 1985）が提唱した信頼性（trustworthiness）と、下位要素である4つの概念である信用可能性（credibility）、転用可能性（transferability）、確認可能性（confirmability）、明解性（dependability）は、多くの質的研究者に支持されてきているが、これも科学

性を担保できるという論証にはなっていない。一例をあげれば、「信用可能性」を高めるための具体的な実践として「長期関与」「持続的観察」「トライアンギュレーション」「中間報告」「分析的帰納」「参加者チェック」といったいくつかの方略を示しているが、これらはいくまで研究者の研究目的によるものである。例えば、長期関与や持続的観察が必要かどうかはいくまで研究目的によるものであり、「現場に入ったばかりのソーシャルワーカーはどのような体験をするのか」ということに研究関心があった場合は、必ずしも必要な条件ではなくなるからである。

### 3. 構造構成主義による質的研究の科学性

#### (1) 質的研究と構造主義科学論

構造主義科学論を提唱した池田は、外部実在を先験的に置かずに共通理解を可能とする戦略的出発点として「私」「観念」「現象」という3つから科学論を構築している。池田によると科学とは「コトバ(単語)の形でしか形式化されていない同一性を、『明示的な関係式プラス別のコトバ』=『構造』に変換してしまおうとする試み<sup>5)</sup>」であり、「科学とは、現象を構造によってコードし尽くそうとする営為である」と述べている(1990:105-106)。

この構造主義科学論は「池田によれば、科学は真理を目指すのではなく、『同一性』を目指す営みである。変化する自然現象を、変化しない同一性(言葉)で記述すること、これが科学の営みだというわけです。簡単すぎるくらいですが、これ以上の定義はありません」(山本・吉川2004:218)と述べられているように、近年になってその意義が認められるようになってきている。

構造主義科学論において、理論の優劣は、現象をいかに上手に説明できるかで判断される。池田は科学を「厳密科学」と「非厳密科学」に分類し、物理学、化学などは厳密科学であり、医学領域の大部分は非厳密科学であるとしている(1998:267-271)。ソーシャルワークも非厳密科学の1つとして捉えられる。ただし、厳密科学か非厳密科学かは研究対象の特性によるものであり、両者とも科学であり優劣はない。また、構造の記述は研究対象によって数式や記号で表記する場合もあれば、言語による記述の場合もあり、それは研究者の研究目的や関心に照らし合わせて選択されることである。

量的研究はモノを対象とする科学であり、質的研究はコトを対象とする科学である(高木2007:713)。構造

主義科学論の立場ではその違いは構造の記述に数式や記号を用いるのか、言説を用いるのかの違いであり、現象を上手に説明するための構造を作ろうとする点では同等である。

#### (2) コトバの信憑構造と解釈の妥当性

質的研究では、テキストとして、情報提供者の言説(コトバ)をデータ化する。その際に、研究者の主観によりテキスト解釈が行われるという批判がなされる。そのため、質的研究における言語テキスト解釈の妥当性への疑問を解消する必要がある。この疑問とは研究者による解釈と、情報提供者の言ったこととの意味内容が一致するのかということである。

竹田(2001:128)は、「言語の信憑構造」として、対象(現象)、発語者(話し手)、言語表現、受話主体(聞き手)の各二者間に信憑関係が存在することで、認識了解と意味理解の確信が成立するとしている(図2参照)。そして、「確信」もまた総じて到来的な本性を持つのである、としている(2001:166)。言い換えるならば、私たちは実際の会話において、普通は言っていることの意味は自然と理解できるということである。

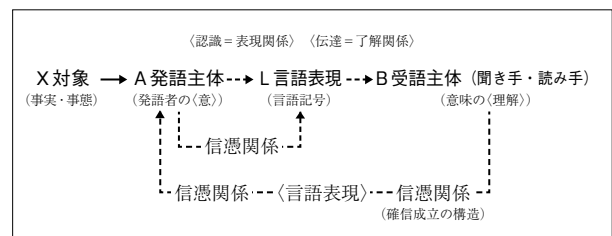


図2 言語の信憑構造

竹田青嗣(2001)『言語的思考へ—脱構築と現象学』径書房, p128.

その理由として、丸山(1981:92-116)によると、ソシュール(Saussure, F.)は、ラング(一般的言語)は、パロール(発語)によって社会的に構成されるシステムであり、そして個人の内部世界(脳内)に構成されたシステムであると述べており、したがって、ラングとしてある現象についての認識構造は、研究者と情報提供者で同一あるいは同型であることが了解できれば、研究者が情報提供者から得た言語情報を正しく解釈できることになる。

高木(2007:714)は、言語と認識構造に関する前提は原理的には証明不可能であるとしつつも、同一の社会において、私たちがこれらの成立に関して共通理解が得られる理由として次の3点をあげ、これらの思いは、通常多くの成員に了解されていると考えられると結論づけ

ている。

- 1) 情報提供者と研究者の間で会話が正しく成り立つ。
- 2) 真善美に対する価値観に違いがない。
- 3) 喜怒哀楽などの感情面での違いがない。

さらに高木は、質的研究の結果に対して「そんなことはわかっている」という批判の存在自体が、本質的な問題であるテキスト解釈におけるコード化やコアカテゴリーの抽出などの密接に関係しているものと捉えており、その批判の存在が、社会的にみて多くの人の認識構造の同一性／同型性の証拠になるのではないかと述べている（2009b：226）。

今後は、研究成果を積み重ねることにより、テキスト解釈の妥当性について明らかにされれば、質的研究における科学性もより明確になるものと考えられる。このテキスト解釈に関して「言語の生得性」についての研究<sup>6)</sup>を質的研究にも援用していく必要があるのではないだろうか。

### （3）構造化に至るまでの諸条件の開示

西條（2009：40-45）は、科学を「狭義の科学」（従来の自然科学のように、条件統制することで、再現性を確保する）と「広義の科学」に分類し、科学の条件として①現象をうまく説明する構造の提起、②「条件統制」ではなく「条件開示」、を基準にする必要があると提案している。

狭義の科学性のみを科学と位置付けてしまうと、条件統制が難しい、あるいは不可能な一回起性の事例研究等（質的研究）における科学性を担保できなくなってしまう。

そのため、「条件開示」は、仮説の妥当性、有効性や限界、射程といったことを含めて他者が批判的に吟味できるような提示の仕方を求めている。したがって、どのような関心のもとで、どういった事象を対象とし、どういった視点から、どのような研究手法によってアプローチした結果、どのような構造（仮説）が構成されたのか（＝どのような知見が得られたか）といった「構造化に至る諸条件」を開示することである。それにより、広い意味での反証可能性は担保され、そうした諸条件を踏まえて他の研究者や実践者がその構造（仮説）の有効性を判断できるようになる。

### おわりに（本研究の意義と限界）

本研究の意義としては、従来の質的研究は非科学的であるという認識から、構造構成主義を認識論に据え、構

造主義科学論に基づくことにより質的研究も量的研究同様に科学的な理論（仮説）として成立することを明らかにした。併せて、コトバの信憑構造と解釈の妥当性、構造化に至るまでの諸条件の開示、を行うことで広義の科学性が担保できるようになった。ソーシャルワークでの質的研究を行ううえでも意義があるものと考えている。

次に本研究の課題であるが、構造構成主義の認識論は量的研究者とは共通理解がなかなか図れない実情がある。共通理解が図れるように地道に説明する必要がある。また、質的研究で重要なテキスト解釈における妥当性について詳細に論じられなかった。この点に関しては次の機会に譲りたい。

### 【注】

- 1) 不毛な信念対立とは建設的な議論を阻害している対立であり、例えば依拠するパラダイムの前提条件に立脚した対立のことをいう。詳細は西條剛央（2005）『構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理』北大路書房、を参照のこと。
- 2) 同義反復する命題のことである。たとえば「すべての人間は人間である」というのは、トートロジーになっていて反証できない。
- 3) たとえば「天気の変化はすべて神様の思召しである」といったものは、どのような天気が起こったとしても「思召し」で説明されるから反証できない。
- 4) 中村雄二郎（1992）は、科学の認識様式の違いから普遍性・論理性・客観性を特性とする「西洋科学の知」と、コスモロジー、シンボリズム、パフォーマンスという特性の「臨床の知」の2つに分類した。（『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年）
- 5) たとえば「水は酸素と水素から構成される」というものは、【 $A + B \supseteq C$ 】という形式において、Aには酸素、Bに水素、Cに水というコトバを代入した構造とすることができ、構造はコトバを含んでいるため純粋に客観的なものではないが、客観的形式を付与した分だけ客観的になっているということである。
- 6) たとえば、チョムスキー（Chomsky, N.）は「知識、信条、理解などの認知システムは、遺伝的資質により決められた形で発達する」と指摘しており、人間は生まれながらにして脳の構造として言語のための文法システムを持っているという仮説をたてている。そのため、人間の脳内の言語システムは、異なる文法にも対応できるものであり、普遍文法と個別文法に整理している。Chomsky, N., 2002, Belletti, A., & Rizzi, L. 2002, *On Nature and Language*. Press

Syndicate of the University of Cambridge. (= 2008, 大石正幸・豊島孝之訳『自然と言語』研究社.)

### 【引用】

- 榎本博明 (2003) 「自己心理学研究の方法論をめぐる議論—質的研究の地位向上に向けて」『自己心理学研究』第1巻, 1-9.
- Flick, U. 1995, *Qualitative Forschung Reibec bei Hunburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag* = (2002 小田博志・春日常・山本法子・宮地尚子訳『質的研究入門—人間科学>のための方法論』春秋社.)
- 池田清彦 (1998) 『構造主義生物学とは何か：多元主義による世界読解の試み』海鳴社.
- 池田清彦 (1990) 『構造主義科学論の冒険』毎日新聞社.
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂.
- 京極真 (2006) 「EBR (evidence-based rehabilitation) におけるエビデンスの科学論—構造構成主義アプローチ」『総合リハビリテーション』第34巻5号, 473-478.
- Lincoln, Y. S. , & Guba, E. G. 1985. *Naturalistic inquiry*. London : Sage.
- 中山康雄 (2008) 『科学哲学入門—知の形而上学』勁草書房.
- 波平恵美子・道信良子 (2005) 『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして—』医学書院.
- 岡本民夫 (2000) 「ソーシャルワークにおける研究方法の課題」『ソーシャルワーク研究』第25巻4号, 249-254.
- Popper, K. R. , 1959, *The Logic of Scientific Discovery* : London : Hutchinson (= 1971 大内義一・森博 訳『科学理論の発見 (上)』恒星社厚生閣.)
- Popper, K. R. , 1976, *Unended quest: An intellectual Autobiography*. (= 2004, 森博 訳『果てしなき探求：知的自伝 (上)』岩波書店.)
- 西條剛央 (2002) 「人間科学の再構築 I—人間科学の危機」『ヒューマンサイエンスリサーチ』第11巻, 175-194.
- 西條剛央 (2003) 「『構造構成的質的心理学』の構築—モデル構成現場心理学の発展的継承」『質的心理学研究』第2巻, 164-186.
- 西條剛央 (2005) 『構造構成主義とは何か—次世代人間科学の原理』北大路書房.
- 西條剛央 (2007) 『ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社.
- 西條剛央 (2008) 『ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM アドバンス編』新曜社.
- 西條剛央 (2009) 『看護研究で迷わないための超入門講座』医学書院.
- 斎藤清二 (2003) 「NBM における研究法」斎藤清二・岸本寛史『ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践』金剛出版, 2003年, 65-67.
- Schwandt, T. A, 2007, *DICTIONARY QUALITATIVE INQUIRY*. (= 2009 伊藤勇・徳川直人・内田健監訳『質的研究用語辞典』北大路書房.)
- 志村健一 (2008) 「エビデンスをめぐる三種のちから—構造構成主義ソーシャルワークの提唱」『ソーシャルワーク研究』第34巻1号, 1.
- 杉万俊夫 (2009) 「人間科学における主観的言説の重要性」『集団力学』第26巻
- 高木廣文 (2007) 「質的研究は科学としてエビデンスをもたらすか」『看護学雑誌』第71巻8号, 712-715.
- 高木廣文 (2009a) 「質的研究とはどんな研究なのか—量的研究と質的研究—」『看護研究』第42巻1号, 69-74.
- 高木廣文 (2009b) 「テキストの主観的解釈は科学的か」『看護研究』第42巻3号, 221-228.
- 竹田青嗣 (2001) 『言語的思考へ—脱構築と現象学』径書房.
- Willig, C. , 2001, *Introducing Qualitative Research in Psychology*. Open University Press (= 2003, 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳『心理学のための質的研究入門—創造的な探究に向けて』培風館.)
- 山本貴光・吉川浩満 (2004) 『心脳問題』朝日出版社.
- 安井理夫 (2009a) 『実存的・科学的ソーシャルワーク』明石書店.
- 安井理夫 (2009b) 「ソーシャルワーク実践の科学化と方法」太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』相川書房.

### 【参考文献】

- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』岩波書店.
- 三毛美子 (2003) 『生活再生にむけての支援と支援インフラ開発—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み』相川書房.
- 長崎和則 (2010) 『精神障害者へのソーシャルサポート活用—当事者の「語り」からの分析』ミネルヴァ書房.
- 竹田青嗣 (2008) 「看護にいかす現象学の知」『看護研究』第41巻6号, 475-490.
- 立川健二・山田広昭 (1990) 『現代言語論—ソシュール, フロイト, ウィトゲンシュタイン』新曜社.
- 横山登志子 (2008) 『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.